

玉川教会たより

NO.476

12月20日

▼使徒信条の一節に「陰府に下り」とあります。

「十字架にけりしは、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがへり」

しかし、陰府の描写は全くありません。

十字架の場面は金曜日、復活の場面は、日曜日のキリストです。その間には、土曜日のキリストが存在します。全く描写のない土曜日のキリストが存在します。

▼「見よ、おとめが身にもって男の子を産む。その名はインマヌエル」



「見よ、おとめが身にもって男の子を産む。その名はインマヌエル」

葬られ、陰府に下り

セカリヤ2:10、17

と呼ばれる。「この名は、神は我々と共におられる」という意味である」
そして、今日の箇所、14節。「わたしは来て、あなたのために住まう」
15節。「わたしはあなたのために住まう」

この箇所は、マタイ福音書のインマヌエルの神の預言の根拠の一つと言えましよう。

▼「私たちは、何処で、どんな時に、神をまにいて敬いようか。何かに、神をパーティーの時ですか。何かのスポーツに試合に熱中している時ですか。辛い受験勉強の時でしょうか。それもあるかも知れませんが、陰府に下り」

の時だけではなごうか。

神をまにいて敬うのは、他の誰にもする訳には行かない、他の誰も助けてはくれない時です。

▼セカリヤは、今日の箇所、11節、12節を強調しています。11節、10、12節で、3度も繰り返して言われていること、つまり、主があなたがたと共に居るといふことです。終わりの日に主をお迎えしようとして、神殿建築に向かう民と共に、主が既に一緒に居られるといふことです。

▼この箇所、聖書一流の逆説があります。来るべき日に主をお迎えすべく働く者と共に既に主がおられる。これが逆説です。そして、この箇所は、私たちの教会の様にも全く当て嵌ります。私たちの教会には、やがて来るべき主を待ち望みつつ日々の礼拝を守るといふ信仰、その礼拝する民と共に、聖霊とご霊が主がおられるという、教会の外の者がそれだけを聞いた矛盾としか思えない信仰が生きつづめています。

矛盾としか見えなごうか、この二つの要素の、どちがかを捨てたら、もう教会ではありません。

▼このセカリヤ書の第一の強調点が、マタイによる福音書にも述べられています。「見よ、おとめが身にもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる」この名は「神は我々と共におられる」という意味である」
インマヌエルがそうです。インマヌエルは、ヨセフの不安を、希望、喜びに変えるものです。不安も希望も未来に向けられたものです。そして、不安と希望の違いは、そこに神の関与があるかどうかで決まるのです。だから、正しい信仰を失った者には、教会には、不安があっても希望はありません。

▼ものみの塔の人々は、クリスマスをお祝いすること、喜ぶとごうことをしません。彼らには、終末の裁きはたまた恐怖の対象です。クリスマスとは裁きの主が来たことですから、当然かも知れませぬ。この箇所は、統一原理でも同じです。クリスマスを素直に喜ばない教会は、やはり、正しい信仰から掛け離れた教会だと言わなくてはなりません。

▼「私たちは、心からクリスマスに救い主の誕生を喜ぶことが出来ます。例え、重篤な病床にあっても。その方は、陰府に下りて、一緒に居るとおられるからです。」